

越境人

2

〜それぞれの国境を貫く

99年、AMDAの調整員としてコンボに向かい、難民への移動クリニックや、診療所のサポートを続けました。戦争では病院などが駐留基地に利用され、さまざまな畏れが残されることがあります。ドアを開けると爆発する(二重けや、ペンに似せた爆弾がないか軍が確認した後、病院の復興に取りかかることもありました。

戦後生まれの私にとって、現地はこれまでの常識を覆す世界。平和で豊かな日本に比べて、「タイムマシンで別の次元に来たのでは」と思うこともありました。あの不思議な感覚は忘れられませんが、もっとも、最初から国

情報センター理事長と面識があったこともあり、AMDAの事務を手伝ったこともあります。それでも、当時はまだ国際支援に興味がありませんでした。

なぜ助けるのか考えて

岡山大学大学院 近藤 麻理さん(45)

転機は30代半ば。海外でお金のない生活をしていると、食べさせてもらったり、何かを「してもらう」ことはわかり。何か返さしたい、自分に出ることをしないと、自分が当てる」と思ったんです。タイで知り合った女性がエイズに苦しんだこともあり、HIV専門の看護士がいて、エイズ対策が進んでいるタイで、プライマリヘルスケアの修士号を取得しました。岡山大では国際協

力やエイズの地域ケアについて教えています。「国際貢献したい」という学生もいますが、そういう学生には「なぜ人を助けたいのか」と尋ね返す。ちょっと意地悪かも

付き合えるのは、上から「施す」やり方ではなく、現地主体のローカル・イニシアチブを尊重しているから。学生にはハウツ

【石川勝義】
タイ・マヒドン大で修士号を取得した。99年5月から約10カ月間、コンボでAMDA調整員として活動。高知医大(現高知大)助手、兵庫県立看護大博士課程などを経て05年から現職。一般教養講義「国際協力とボランティア」は抽選になるほどの人気。



国際協力について講義する近藤准教授
＝岡山大で